

## ステイクホルダー ～流域の専門家と住民～

著者	村上 雅博
雑誌名	四万十・流域圏学会誌
巻	9
号	1
ページ	1-2
発行年	2009-12-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10173/760">http://hdl.handle.net/10173/760</a>

< 巻 頭 言 >

## ステイクホルダー ～流域の専門家と住民～

村上雅博

昭和58年(1983年)のNHK特集“土佐・四万十川”で報道された「日本最後の清流」が四万十川の代名詞となっている。全国的に河川の環境問題に高い関心が集まる過程で汚水処理や下水道整備が進められて、高度成長の影のつけを負わされた河川の水質環境は徐々に改善されてきており、過去25年間で国の水質環境基準の達成率は65%から90%を超えるに至っている。しかし、高知県は全国を代表する地方であり、地方行政の財政基盤がけって豊かなどころの話ではなく、全国で再下位レベルを常に歩んでいるため、国レベルの環境分野の予算配分の優先度は後回しにされる傾向にあり、特に高知県西部の過疎地域に位置する四万十川流域に下水道が整備されるなどは夢の上の話と受け止められている。“日本最後の清流”とまで称される四万十川の水環境を、国に頼らずに地方の知恵と工夫で何とか保全したいとの創意から、流域内に分散している小規模の町村やコミュニティから発生している未処理の生活排水を処理するため、施設建設費用が安く、運営・維持管理が比較的単純で、さらに環境にやさしい、自然循環式(四万十川方式)水処理技術を高知県が主導して独自に開発した。地方自治体と流域住民の相互理解と協力で、鮎がたくさん棲んでいる四万十川の水質環境の汚染を予防的に防ぎ地域の環境を保全・再生しようという当時としては画期的な地方の取り組みの一つである。ここで生まれてはぐくまれた“四万十”の考え方、つまり“四万十コンセプト”は、日本の財政基盤が弱い地方自治体のみならず貧しい発展途上国の環境改善を進めるための技術協力の一つの足がかりと評価され、国際協力機構(JICA)のプログラムで過去10年間に100名を超える途上国の研修生が高知工科大学の四万十川方式水処理技術の研修に派遣されてきている。

高知県の林業振興・環境部・環境共生課のホームページには、「四万十川の天然繁殖魚は94種で全国第1位、遡上可能区間の割合は94%(平成元年度)で四国第1位、全国第6位です。藻類収穫量が全国第1位で、アユ漁獲高も河川延長1kmあたりの漁獲量が全国第1位です。天然アユ、ウナギ、エビ、カニなどの味覚に出会え、日本の河川では珍しい専業の川漁師もいます」と書かれている。四万十川の鮎の産卵場に近い下流基準点(具道)で観測されている水質指標のBOD(生物化学的酸素要求量)は0.8mg/lと、測定限界に近い清冽さを有しているにもかかわらず、流域住民のなかには、“川が汚くなってきている”との印象を伝えている方もおられる。鮎の漁獲量が昭和58年の1,000tから平成17年の200tまでほぼ連続的に落ち込んできているし、流域の森林保全整備(間伐)問題もあることは事実であるが、科学的な環境評価と流域に住む住民の一部の個人的な印象的や感覚が必ずしも一致しているというわけでもない。問題の全てを科学的な知見だけで一方的に解決することは難しいという新たな課題が見えてきている。四万十・流域圏学会を発足させたキーパーソンの一人である宇多高明氏(当時建設省土木研究所河川部長)は1999年5月のプレビュー号の巻頭言で、専門家と市民の関係について、「我が国では、いわゆる専門家と呼ばれる学者・研究者がおり、これらの専門家は研究論文を書くことを生業としてきている。しかし複雑化し、多様化した現在の世の中では、先端論文は一般の技術者が理解できないほどに先端的となっている。それでいて、現場や一般市民の間では、比較的単純なことさえ理解が進んでいないという事態が起こっている」、それでは如何すれば良いのか?「難しい話はやめて皆で現地へ行こう!実物を目の前にして議論を行えば、新しい認識や多くの発見が得られるとともに、相互理解が進むであろう」、と述べている。科学的な知識や理解を一つのベースとして、流域に係わる出来る限り多くの関係者や関心のある方(ステイクホルダー:Stakeholder)と相互の理解や交流ができるような場と機会が学術研究発表会やユースセッションのエクスカージョンおよび学会誌を通じて提供できるように、流域に根ざした学会の意義と役割について再認識したい。10年は節目の年になるであろうと、感じている会員も多くののではないかと思ひ、新たな展開を模索しはじめている事務局の背景について僭越ながらも一言のべさせていただいた。

四万十・流域圏学会は高知県が企画し、2年間の準備期間を経て全国では初めての地方発信型の流域圏学会を発足させ、今年5月に10周年の節目を迎える。かなり多くの方が、四万十川・流域圏学会と勘違いをされているように思われているが、この背景は、四万十川という固有の河川の名前をつければ四万十川の流域のみを対象とした活動に限定する根拠とされる可能性もあり、県内でも四万十川に負けずとも劣らない立派な一級河川である仁淀川と物部川があることを無視するという受け止め方をされてはいけないということから、あえて四万十川から川の文字をはずして”四万十“というコンセプトの名称に落ち着いた。今日まで多くの方への、まぎわらわしい名称で歩みはじめたことに対する事務局からの告白の一つである。

今年から“坂本龍馬”がNHK歴史ドラマの主演となり全国的なブームになりつつある。龍馬の歴史ドラマのハイライトの一つが明治維新に向けて勇気をもって一歩を踏み出した“脱藩の道”は、四万十川の最上流域の梶原町が起点の“流域越えの道”である。今年、5月30日(日)に10周年を迎える四万十・流域圏学会の10周年記念大会を龍馬の縁の地である“梶原町”で開催する。ご案内は本号の巻末の“おしらせ”に掲載されているので、是非ともご参照上、今年5月の記念大会にご参加いただければ幸甚である。第10周年記念大会は、龍馬の地である土佐の高知という一地方から日本のみならず世界をみつめた新たな「流域圏学会」への一歩を踏み出す転機になることを願っている。

